

報 告

地域活性化事業「ほほ笑い広場」3年間の活動報告

Three years activity report of local revitalization business "Hohoemi Hiroba"

中村有美子*¹

要約:平成26年度の介護保険法の改正により、デイサービスを利用できなくなった要支援者のサポートをするために介護予防を目的とした「ほほ笑い広場」を開設した。それは、大学の地域活性化事業として、大学とほほ笑い広場のリーダーが協働で実施している事業である。

本稿の目的は、ほほ笑い広場の事業活動内容の分析と振り返りを行い、取り組みの意義と課題を明らかにし、地域内全体への発展への示唆を得ることである。

ほほ笑い広場の構成員は、地域高齢者、協力構成員として地域ボランティアと学生ボランティア、施設側リーダー2名と大学側リーダーである。3年間で計24回開催し、参加のべ人数は496人であった。構成員別参加のべ人数は、地域高齢者256人、地域ボランティア104人、学生ボランティア72人、開催者である施設側リーダーと大学側リーダー64人であった。ほほ笑い広場の実施内容は、歌や体操、昼食会、レクレーションを基本プログラムとし、随時季節を取り入れた特別行事を追加している。課題は、地域高齢者が受動的な参加であるため、高齢者の持てる力を引き出し主体的参加となるよう、各々の役割や責任を持てる事業に発展させることが重要である。

今後、構成員全員で協働体制をもち、地域高齢者やボランティアの持てる力を引き出せるよう役割分担していくのが地域のリーダーと大学側のリーダーの役割である。さらに地域高齢者、地域ボランティア、学生ボランティアのニーズを見つけ出し、事業計画を立て、役割に合った事業を行うためには、地域のリーダーが必要である。この役割を地域ボランティアで引き受けてもらい、新しい場所で展開されることが望まれる。このように、地域ボランティアが運営し、地域のリーダーは広げていく、それらの見守りをするのが地域を担当する保健師の役割である。今回、大学が地域と協働する役割モデルを示した。この方法論が地域で拡大することを期待する。

Key Words: 地域高齢者、ボランティア、リーダー、介護予防事業、地域包括ケアシステム

I. 諸言

地域包括ケアシステムは2010年の地域包括ケア研究報告書¹⁾で述べられているように、「医療・看護」、「介護・リハビリテーション」、「予防・保健」、「生活支援・福祉サービス」、「住まいと住まい方」が一体的に提供されるシステムである。

それらのサービスの提供には、市町村が行う保健サービスなどの「公助」、医療機関等の医療・看護ケアサービス提供、介護保険法による介護・福祉施設等の介護ケアサービスなど「共助」の公的サービスに加え、「自助」を高め、家族・近隣住民などの「互助」と有機的に連携することが不可欠である。

2014年には、医療介護総合確保法が制定された。こ

の法に基づく対策のポイントは、医療・介護供給体制の総合的な構築をはかることである。これにより、医療提供体制の機能分化が明確になり、在宅への退院支援がはかられ、入院期間の短期化、ひいては医療費の増加問題の解決への期待という社会的意義がある。また、在宅ケアの充実により、地域包括ケアシステムの目標でもある、高齢者が住み慣れた地域でいきいきと自分が望む生活を在宅においても継続し、自宅で安心して最期まで過ごすことを目指している²⁾。

平成26年の介護保険法改正にて、それまでデイサービスを利用していただいていた要支援者の利用が出来なくなり、虚弱高齢者の集う場がなくなった。そこでB市内でデイサービスセンターを営んでいる施設共同経営者より、そういう人たちの集う場を作りたいが作り方がわからないので協力して欲しいと、元保健師であり、現在看護大学教員である著者（以下、大学側リーダー）へ協力要請があ

2019年12月3日受付／2020年1月23日受理

*¹ Yumiko NAKAMURA
関西福祉大学 看護学部

った。それは、大学の「地域社会の発展に貢献する開かれた大学」の実現という基本理念の下、大学が目指すべき重要な役割であると考え、2017年5月から、大学の地域活性化事業として、相談のあった施設共同経営者をリーダー（以下、施設側リーダー）とし、協働で、ほほ笑い広場「そうご」（以下、ほほ笑い広場）を開催するに至った。

その事業も3年目を迎え定着している。そこで、事業活動内容を分析し振り返りを行い、参加者を支えるために行った大学側リーダーと施設側リーダーが協働で介護予防事業に取り組むことの意義と課題を明らかにし、さらに地域内全体への発展への示唆を得ることを目的とし、活動報告を行う。

II. 実施方法

1. 対象の概要

A県B市は、高齢化率が38.7%（平成30年10月1日）³⁾であり、A県の30.0%（平成30年国勢調査）、全国の28.1%（平成30年国勢調査）と比較すると高齢化の進んでいる市である。

ほほ笑い広場の参加対象者は、B市C町に住む介護保険サービスを受けていない75歳以上の高齢者である。75歳以上とした理由は、後期高齢者になると介護が必要になる人の割合が増えること、地域の元気な高齢者の集いに参加出来にくい現状があることより、孤立化を予防する目的も含み、75歳以上とした。

ほほ笑い広場は、月1回、原則第3土曜日に開催した。開催日の1日のスケジュールを表1に示す。開催時間は、10時30分から15時30分であり、体操や歌、昼食会、レクリエーションを基本プログラムとしている。それに随時季節を取り入れた特別行事を追加している（表2）。

表1. ほほ笑い広場の1日の基本スケジュール

時間	実施内容
9:30	スタッフミーティング・会場準備
10:00	送迎・来所者受付・健康観察
10:30	挨拶、歌、体操
11:45	昼食準備
12:00	昼食
13:30	レクリエーション・ゲーム
15:00	茶話会・次回の予定話し合い
15:30	解散・送り

表2. ほほ笑い広場の季節ごとのプログラム

季節	内容
春	<外出> お花見・その他
夏	夏祭り 流しそうめん・かき氷
秋	紅白対抗運動会 <外出>工場見学
冬	忘年会・クリスマス <外出>初詣 / ゲーム（かるた・すごろく） 節分（巻きずし作り） ひな祭り昼食会 / おひな様の折り紙制作

運営は、施設側リーダーであるデイサービスセンターの共同経営者とその経営者、大学側リーダーの3名が中心になり行っている。

さらに、ほほ笑い広場の運営には、複数のボランティアの協力を得た。ボランティアは、地域ボランティアと学生ボランティアを募ることにし、施設側リーダーが地域ボランティア、大学側リーダーが学生ボランティアを呼びかけた。

2. 事業の内容

事業の実施期間別に準備期（2017年6月～8月）、1年目（2017年9月～2018年3月）、2年目（2018年4月～2019年3月）、3年目（2019年4月～10月）に分け、今回は、3年目の10月までを報告する。事業内容は、施設側リーダーと大学側リーダーが協議し、相談しながらプログラムの企画を行った。

3. 倫理的配慮

ほほ笑い広場の活動報告を行うにあたり、地域高齢者、施設側のリーダー、地域ボランティア、学生ボランティアに活動報告の目的、個人が特定される内容ではないことを口頭で説明し了解を得た。

III. 実施結果

1. ほほ笑い広場の実施内容及び参加状況

ほほ笑い広場の実施は、1年目7回、2年目11回、3年目6回の計24回行った。

実施は、高齢者に季節を感じてもらえる要素を取り入れた内容になるようお花見、夏祭り、運動会、忘年会、ひな祭りなどの特別行事を入れて企画し実施した。具体的な年間のプログラムを表3に示す。

表3. ほほ笑み広場の年間プログラム

月	回	1年目 (2017年9月～2018年3月)	2年目 (2018年4月～2019年3月)	3年目 (2019年4月～2020年3月)
4月	1		【外出】お花見 (閑谷学校・和気藤棚), お弁当	1 歌, 体操, ゲーム等
5月	2		体力測定, レクリエーション, ゲーム	2 【大学見学】地域連携フォーラム 講演, 分科会に参加
6月	3		ヨガ体験, レクリエーション, ゲーム	3 ヨガ, ゲーム, レクリエーション
7月	4	6～8月準備期間	【オープンハウス】小学生とのふれあい そうめん流し, かき氷, 宿題教室, 雑巾作成	4 【ほほ笑み夏まつり】小学生とふれあい そうめん流し, かき氷, ポップコーン, 綿菓子, 雑巾作成
8月			【夏休み】	【夏休み】
9月	1	体操, ゲーム, 昼食会, 茶話会	運動会, 昼食会, 茶話会	5 【外出】醤油工場見学 (ドレッシング作り)
10月	2	フラダンス, お好み焼きパーティー, ゲーム他	【外出】ヤクルト工場見学, 外食	6 紅白対抗運動会
11月	3	体操, 調理実習 (カレー), カラオケ ハンドマッサージ	フラダンス体験, ゲーム他	7 フラダンス体験
12月	4	体操, なべパーティー, クリスマス会	体操, なべパーティー, クリスマス会, ハンドベル	8 忘年会, クリスマス会
1月	5	絵馬, おでんパーティー, 初詣, かるた すごろくゲーム	【外出】大石神社初詣	9 新年会, 初詣
2月	6	体操, 調理実習 (巻き寿司), 健康・体力チェック ゲーム	【独居の集い】合唱, 折り紙	【冬休み】
3月	7	体操, ゲーム, 昼食会, 茶話会	ヤクルト健康講話, ひな祭り昼食会, 合唱, 折り紙	10 ヨガ, アルバム作り

ほほ笑い広場の主構成員である地域高齢者で3年間を通して参加した人は9人、約2年間参加した人は3人、約1年間参加した人は8人であった。

さらに、ほほ笑い広場の協力構成員は、ボランティアと開催者であり、ボランティアは、地域ボランティアと学生ボランティアである。開催者は、デイサービスセンター経営者、その共同経営者である施設側リーダー、大学側リーダーである。

ほほ笑い広場は、3年間で計24回開催し、参加のべ人数は496人であった。構成員別参加のべ人数は、地域高齢者256人、地域ボランティア104人、学生ボランティア72人、開催者である施設側リーダーと大学側リーダー64人であった。

ほほ笑い広場の年度別開催状況は、1年目は7回実施し、実人員は地域高齢者が17人、開催者を含む協力構成員は16人、計33人、のべ人員134人である。2年目は11回実施し、実人員は地域高齢者19人、協力構成員19人、計38人、のべ人員235人であった。3年目は10月までに6回実施し、実人員は地域高齢者13人、協力構成員21人、計34人、のべ人員127人であった。構成員別参加実人員及びのべ人員を表4に示す。

1回あたりの地域高齢者は、1年目11.1人、2年目11.5人、3年目8.5人となっており、3年目になると3人程度減少している。反対に1回あたりの協力構成員は、1年目8人、2年目9.8人、3年目12.6人と年々増えている状況である。

2. 構成員別の取り組み

1) 地域高齢者の状況

75歳以上ではあるが、地区の元気高齢者の集いにも参加している地域高齢者も参加し、13名でスタートし

た。「みんなで話しながら食べることが1番のごちそう」、「ここへ来たら1か月分笑うわあ」と地域高齢者からは満足感が伺える。

2年目に入り、毎回12～13人の参加である。参加メンバーや地域包括支援センターからの紹介、さらには、外出機会を希望しての本人、家族の申し込みなどで地域高齢者の参加者は増えていた。しかし、3年目開始頃より、メンバー自身の体調不良や家族の介護、施設入所などで、来所困難となり、参加者が徐々に減少している現状である。また、新規の高齢者が1～2回の参加のみで継続参加出来ない状況でもあった。

2) 地域ボランティアの取り組み

3人の地域ボランティアの参加よりスタートしたが、地域ボランティアが友人を誘い、1年目の年度末には5人となった。参加時の平均年齢は69歳であり、就業を有しているボランティアは2人であった。地域ボランティアの主な取り組みは、昼食やお茶の準備、後片付けを担当している。昼食は、メニューを考え、食材の買い出しや事前の準備、当日は、調理から配膳まで、旬の食材を使い、盛り付けも彩りを考え提供している。さらに午後からは、ゲームやレクリエーションにも地域高齢者と共に参加し、会の盛り上げを行う。

2年目に入ると毎回、5～6名のメンバーで定着しており、地域ボランティア自身も参加が楽しみになっている現状である。来所時には近所の地域高齢者を送迎するなど、自主的な活動も定着している。また、地域高齢者と同じく行った体力測定実施後、自分の体力の低下に気付き、ウォーキングを始めるなど、行動変容につながったメンバーもいた。

表4. ほほ笑い広場の構成員別参加のべ人数（実人員）

		(人)			
		【実施回数】	1年目【7回】	2年目【11回】	3年目【6回】* ¹
地域高齢者			78 (17)	127 (19)	51 (13)
1回あたりの地域高齢者数			11.1	11.5	8.5
協力構成員	地域ボランティア		22 (5)	51 (6)	31 (10)
	学生ボランティア		13 (8)	28 (10)	31 (8)
開催者	施設側リーダー2名と 大学側リーダー		21 (3)	29 (3)	14 (3)
1回あたりの協力構成員* ²			8	9.8	12.6
総計			134 (33)	235 (38)	127 (34)

*¹ 3年目は、10月までの人数

*² 開催者含む

3) 学生ボランティアの取り組み

大学側リーダーの声掛けにて1年目は2名の学生ボランティアが参加しスタートしたが、年度末には、8名となった。参加時の学生ボランティアの平均年齢は21歳であった。

当初、場の雰囲気に慣れず、地域高齢者に自ら声をかけることが難しかったが、回を重ねるごとに慣れ、楽しいコミュニケーションがとれるようになった。また、ゲームやレクリエーションなど、主体的に企画した内容を実施できるようになった。

学生ボランティアも定着化し、参加者と顔馴染みとなり、コミュニケーションが上手に取れるようになった。さらに、高齢者の生活を自身の祖父母や入院中の高齢者の自宅での生活に置き換えて考えられ、地域高齢者の生活の様子が理解出来るようになった。

当初3年次生の学生であったため、4年次生になると、就職活動や国家試験の学習で参加出来なくなるので、学生自らちらしを作成し、2年次生や3年次生の学生ボランティア募集を行うなど、後輩の育成も考えるようになった。

3年目を迎えると学生ボランティアの人数も増え、活動も活発化してきている。運動会時の競技プログラムや賞品の準備など運営すべて実施している。

さらに、学生ボランティアの母親で施設の介護職をしている者の参加もあり、地域ボランティアの枠も広がりつつある。また、学生の祖母が趣味で作成した毛糸の座布団やブローチ、カバンなど手作り品を賞品として提供するなど、学生ボランティアの家族も学生のボランティア活動に協力的である。

4) 施設側リーダーの取り組み

施設側リーダーは、ほほ笑い広場の開催準備に向け、社会福祉協議会、地域包括支援センター、地区の民生委員、地区の高齢者の代表者への事業計画の説明を行い、さらに元気高齢者の集いの場等での参加者募集の案内を実施した。具体的には、地区の民生委員より対象高齢者への案内、地域包括支援センターへは、事業計画の連絡及び対象者の紹介を得られるよう調整を図った。さらに地区の元気高齢者の集いの代表者への事業説明、及び地域高齢者の紹介を依頼した。

2年目に入ると地域包括支援センター職員より、ほほ笑い広場が社会資源の一つとして、対象者の紹介があるようになった。

ほほ笑い広場の事業計画策定にあたり、大学の地域活性化事業との整合性を図り、事業目的、対象者は75歳以上であり、地区の元気高齢者の集いに参加出来ない人、介護保険サービスを受けていない人等協議した。

ほほ笑い広場の開催日は、通常のデイサービスの休みである土曜日とし、施設側リーダーの役割として、会場の提供、構成員全員のボランティア保険の加入手続き、参加者への案内、当日の運営等を担うこととした。

第3土曜日に月1回の定期開催としスタートした。ほほ笑い広場開催前日には、電話連絡し、再度の案内を実施した。地域高齢者の送迎が必要な人には送迎の担当を担った。さらに1日のスケジュールのうち、体操やゲームを運営し、フラダンスやヨガのグループとの調整を行った。

2年目も継続して実施するにあたり、月1回の定期開催と猛暑である8月は休みとするなど、参加しやすい内容となるよう、運営面での協議を地域高齢者、大学側リーダーと共に行い、年間11回の開催とした。年間計画立案の段階で地域に開かれた集いになるよう、7月を小学生とのふれあい事業とした。そのため、小学校へ事業説明を行い、ほほ笑いひろば参加の案内を実施した。また、普段外出機会が少ない地域高齢者に外出機会を取り入れ、お花見、工場見学、さらに外食の機会も取り入れた。

施設側リーダーは、参加者の中で認知症の疑いのある人や健康状態が良くない人について、ほほ笑い広場開催の前日までに出席の有無の確認を電話連絡や訪問を行い、参加を促した。また、当日欠席の対象者についても、後日連絡を行い、欠席者のフォローを行った。3年目も前年度同様に年間計画を主催者間で協議し、継続実施することとした。

5) 大学側リーダーの取り組み

準備期では、施設側リーダーからの相談の趣旨に賛同し、大学との協働事業とし、「地域活性化事業」へ事業計画の申請を行った。また、学生ボランティアの募集を実施し、学生との連絡調整を行い、学生生活との両立を図った。年度末には、事業の実績報告、決算報告を実施し、さらに次年度計画の協議時、今年度の事業評価を施設側リーダーと共に実施した。

地域の高齢者がいきいきと生活を送ることができるための介護予防が目的であるため、常に参加者の自立を促す内容となるよう施設側リーダーとの協議を重ねた。具体的には、基本的に昼食は参加者みんなで作る。昼食メ

ニューやレクレーションなど、参加者の希望を取り入れて役割分担をする等を協議した。昼食メニューでは、ちらし寿司やお好み焼きなど普段あまり家で作って食べないもの、大勢で食べると楽しくおいしく食べられる、カレーや鍋パーティー、おでんなどを入れた。また、節分の巻き寿司やひなまつりのちらし寿司など季節を感じられるものを取り入れるよう工夫した。

午前中のスケジュールである歌や体操を担当し、熱中症予防やインフルエンザなどの感染症予防の健康教育やゲームなどを実施した。さらに、介護予防の観点から、高齢者の体力測定をプログラムに取り入れ、自身の体力の状態を理解してもらい、必要な体操を実施するなど、学生ボランティアと共に取り組んだ。

1年目の終了前、施設側リーダーと事業評価を実施し、その中で参加者が受動的であることが課題として挙げられた。そのため、高齢者自身が地域の人々の役に立つ存在であることを認識してもらう事が重要と考え、小学生とのふれあい事業の際には、雑巾を手作りしプレゼントするなどプログラムに盛り込んだ。

3年目に入り、ほぼ笑み広場の事業内容や地域高齢者、地域ボランティアなど定着化してきているため、施設側リーダーを中心に自主的活動へと移行することが必要であると考えた。そのため、大学側リーダーの役割として、事業の協働企画や助成金の申請等を実施するなどし、役割分担を行った。さらに、必要時に施設側リーダーの相談にのることやほぼ笑み広場と学生ボランティアの調整などの後方支援を行うこととした。

IV. 考察

高齢者が住み慣れた地域でいきいきと自分らしい生活を送れることを目標に、集う場を提供し、孤立化予防も視野に入れ、施設側リーダーと大学側との協働事業として実施している。

構成員それぞれの立場より、今後の事業発展のための振り返りを検討することとする。

1) 地域高齢者の課題

事業開始時、地域高齢者の参加対象を、介護保険サービスを受けていない75歳以上の高齢者かつ元気高齢者の集いに参加できない者としていたが、実際は、他の集いにも参加できている元気高齢者も含まれている。施設側リーダーからも現状で良いのかと課題として挙げられているが、元気高齢者は一部であり、その高齢者の紹介で参加している高齢者もいるため、場所にゆとりがある

間は、現状維持とする方向とした。

地域高齢者の参加状況は、ほぼ笑み広場開始より継続しての参加が多いが、中には、1回のみ参加や、体調を崩し数か月休んだ後、次第に不参加になるなど参加者の入れ替わりの状態である。来られている参加者は、「居場所」として参加していると考え、新規に参加するのは、地域高齢者や地域のボランティアの紹介が多くなっている。今後も自分たちの「居場所」として、だれでも気軽に参加できる「場」づくり、仲間づくりにつながる事が重要であると考え。また、3年目に入ると地域高齢者の参加が減少している現状がある。これについては、地域包括支援センターや地区の民生委員など地域の保健福祉関係者への働きかけが重要と考えている。

さらに、プログラムを考える段階や、昼食づくりについても受動的であることが挙げられる。そのため、役割を持って参加できるよう、小学生とのふれあい事業の際、手作り雑巾のプレゼントなど実施したことは、有効な働きかけであったと考える。さらに、高齢者は多くの経験や知恵があり、それらを効果的に活用することでほぼ笑み広場の活性化につながると考える。具体的には、料理を得意とする人、野菜づくりなどの農作業を毎日の日課として行っている人、おしゃべり上手でおしゃれな人、読書が好きな人など多くいる。そういう趣味や特技などを他の高齢者や学生ボランティアに伝えることも重要な役割と考える。高齢者の持てる力を引き出し、自分事として、主体的に参加する「居場所」とするために、各々の役割や責任を持てる広場に発展させることが重要と考える。

2) ボランティアの活動内容について

最初3人でスタートした地域ボランティアであったが、友達を誘うなどし、毎回同じメンバーの5人が参加している。全員70歳代前半ではあるが、参加者の送迎など実施し、活動範囲が広がっている状況である。

施設側リーダーと大学側リーダーの事業評価でもあがっていたが、地域ボランティアが昼食準備や後片づけなどすべて担当し、地域高齢者の主体性を低下させているのではないかと課題として挙げられた。地域ボランティアの活動が活発となると、昼食を参加者みんなで作るということがなくなり、次第にボランティア任せとなった。そのため、昼食は、参加者で作れるものをメニューに取り入れることとし、地域ボランティアは、ゲームやレクリエーションなどに積極的に参加して会を盛り上げる役

割を担ってもらう必要がある。地域ボランティアに参加者の主体性を尊重し、見守り支援する方向を理解してもらう必要があると考える。

現状では、地域ボランティアはほほ笑い広場の企画運営に参画出来ていない。地域の高齢者の生活状況をよく知っている地域ボランティアの存在は大きく、今後も大いに活躍を期待したい。そのためには、企画運営を地域高齢者や施設側リーダーと共に行い、施設側リーダーをサポートし、また、別のボランティアグループとの交流を行うなど、地域のボランティアリーダーとして活躍することが望まれる。

さらに、高齢者がボランティア活動に参加することは、自身の精神的健康度や社会的健康度を高めるなど^{4)~6)}大変意義深い活動であると考えられる。そのため、特定のメンバーによる活動だけでなく、ボランティアメンバーの拡大も必要であり、活動の幅もほほ笑い広場以外へと広げていくことが重要である。それらが、自助から互助への活動となり、ひいては、地域全体へ波及するソーシャルキャピタルの醸成へと発展することが期待できると考える。

一方、学生ボランティアにおいては、大学側リーダーや卒業前の学生ボランティアの声掛けにて集まった学生を中心に活動を実施している。回を重ねる毎に地域高齢者とのコミュニケーションやレクリエーションの運営が可能となっている。

学生にとって、事業に参加することは、授業と異なった学習機会となり、事業の企画、運営など教育的にプラスとなっている。さらに高齢者とのふれあい、コミュニケーションなど社会性の獲得にも大きな意義があると考えられる。今後は、さらに主体的活動となるようサークル活動として実施することも必要である。大学生がボランティア活動を行うことは、今後の職業ともつながり、有意義な学生生活につながると考える。今後の課題として、どう継続していくかと考えるが、その課題に学生自身が気づくことが重要であり、主体的活動になるよう気付きを促し、見守ることが必要と考える。

3) 開催者側の役割について、

施設側リーダーは、会場の提供、ほほ笑い広場の運営、地域高齢者への案内や送迎の実施、さらに地域ボランティアやプログラムの講師との調整など役割が多岐にわたる。そのため、継続実施していくためには、施設側リーダーをサポートし継続的に広場を運営できるような人材

の発掘が必要^{7), 8)}である。また、ほほ笑い広場の企画、運営の役割を担うだけでなく、地域・学生ボランティア、地域高齢者においても主体的にほほ笑い広場に参加してもらえるよう働きかけることも重要である。そのためには、地域高齢者や地域ボランティアと共にほほ笑い広場のプログラムを立案する機会を設け、さらには役割分担を行うなどの働きかけが重要であると考えられる。

大学側リーダーの主な役割としては、助成金の獲得や施設側リーダーと共に年間計画の策定、学生ボランティアとほほ笑い広場の調整を実施している。3年目に入り、可能な限り自主的な活動を目指すことが必要であると考えられる。そのためには、施設側リーダーと学生ボランティアの後方支援としての活動が重要である。具体的には、施設側リーダーがほほ笑い広場を運営する上での課題について共有し、相談支援を行うなどの役割が望まれる。学生ボランティアにおいても自主性を尊重し、レクリエーションやゲームなど学生の意見を取り入れ、実施にあたっての見守りなどの支援が大切と考えている。

さらに、本事業は、「地域社会の発展に貢献する開かれた大学」の実現という大学の基本理念に則った事業である。大学側リーダーの使命として、大学と地域をつなぎ、学生と地域住民をつなぐという役割を認識し、今後も継続、発展するよう尽力することが重要と考えている。

V. 結語

大学の地域活性化事業として、大学側リーダーと発起人である施設側リーダーが協働実施した事業は、地域住民の主体性を尊重し、希望や要望を取り入れた事業である。そこに学生ボランティアが参加することによって、より活性化されていた。学生においてもレクリエーションの企画、運営などを実施することは、教育的にプラスとなっている。また、地域高齢者とのふれあいやコミュニケーションなど社会性の獲得にも大きな意義がある。同時に大学側リーダーの立場では、地域のリーダーを企画面においてサポートし、大学と地域を「つなぐ」ことが重要である。

今後、構成員全員で協働体制をもち、地域高齢者やボランティアの持てる力を引き出せるよう役割分担していくのが地域のリーダーと大学側のリーダーの役割である。

さらに地域高齢者、地域ボランティア、学生ボランティアのニーズを見つけ出し、事業計画を立て、役割に合った事業を行うためには、地域のリーダーが必要である。

この役割を地域ボランティアで引き受けてもらい、新しい場所で展開されることが望まれる。このように、地域ボランティアが運営し、地域のリーダーは広げていく、それらの見守りをするのが地域を担当する保健師の役割である。

今回、大学が地域と協働する役割モデルを示した。この方法論が地域で拡大することを期待する。

謝辞

ほほ笑い広場の活動を報告するにあたり、ほほ笑い広場のリーダーをはじめ、広場の趣旨に賛同し参加して下さる地域高齢者の皆様、開催に協力し運営して下さる地域ボランティア、学生ボランティアの皆様、ほほ笑い広場に関わるすべての皆様に感謝申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省：地域包括ケア研究会報告書（2010）. 2019年11月30日, <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/05/dl/h0522-1.pdf>
- 2) 松田正己：標準保健師講座・3対象別公衆衛生看護活動(第4版), 304-305, 医学書院, 東京, 2018.
- 3) 岡山県：岡山県内市町村別の高齢化率（平成30年10月1日現在）(2019). 2019年11月29日, http://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/9870_44751_misc.pdf
- 4) 本田春彦, 植木章三, 岡田徹, 他：地域在宅高齢者における自主活動への参加状況と心理社会的健康および生活機能との関係, 日本公衆衛生雑誌, 57 (11), 968-976, 2010.
- 5) 藤原佳典, 杉原陽子, 新開省二：ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響 地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義, 日本公衆衛生雑誌, 52 (4), 293-307, 2005.
- 6) 鳥貫秀樹, 本田春彦, 伊藤常久, 他：地域在住高齢者の介護予防推進ボランティア活動と社会・身体的健康およびQOLとの関係, 日本公衆衛生雑誌, 54 (11), 749-759, 2007.
- 7) 小田美紀子, 松岡文子, 斎藤茂子, 他：住民主体による地区活動発展のための課題, 鳥根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 第2巻, 49-60, 2008.
- 8) 早坂玉緒, 張平平, 大塚真理子：自主グループにおける高齢者リーダーの継続的な役割遂行に関する要因—介護予防（一次予防事業）の取り組みから—, 千葉看会誌, 2 (2), 17-23, 2016.